



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	中学校国語における現代文と古典の学習をつなぐ授業実践： 『徒然草』を中心に
Author(s)	小川, 陽子; 豊田, 有美
Citation	[岐阜大学教育学部研究報告. 教育実践研究・教師教育研究] vol.[22] p.[21]-[30]
Issue Date	2020
Rights	
Version	岐阜大学教育学部国語教育 / 岐阜大学教育学部附属中学校
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/79275

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

中学校国語における現代文と古典の学習をつなぐ授業実践 —『徒然草』を中心に—

A Practice to Connect Contemporary Japanese Language and Classics in Junior High School

小川 陽子^[1]・豊田 有美^[2]

OGAWA Yoko/TOYODA Yumi

1. はじめに

「中央教育審議会答申」（平成 28 年 12 月 21 日）では、高等学校の課題のひとつとして「古典に対する学習意欲が低い」ことが挙げられている。高等学校で古典学習が本格化し、現代とは異なる文法体系や語彙を学ぶこと等による苦手意識の増幅も学習意欲の低下と関わっているように、同答申では次のような指摘もなされている。

古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

この指摘を踏まえれば、文法や語彙以前の問題として、古典と現代を生きる自分とを結びつけていくという意識を育成していくことがまずは必要だと言えよう。それは高等学校のみの課題ではない。高等学校の学習へとつなげていくために、小学校・中学校でも時間をかけて育んでいくことが求められよう。このような問題意識を背景として、本稿は、『徒然草』を例として、古典と自らをつないでいく授業の実践を報告するものである。

2. 考察の前提

本稿で主として報告するのは、令和元年度岐阜大学教育学部附属中学校中間研究会における授業実践である。当該研究会は、3 カ年計画の第 2 年目として、2019 年 6 月 16 日、次の主題の下に行われた。

【全校研究主題】 新しい時代を生き抜く生徒の育成
—生徒自らが学校と社会をつなぐカリキュラムの設計—

【国語科研究主題】 既知の知識や経験と結び付けて考えを表現する生徒の育成
—「言葉」を軸にして理解したり、表現したりする授業実践を通して—

全校研究主題に「生徒自らが学校と社会をつなぐ」とあるのは、はじめに述べた古典教育の課題にもつながるものである。今回、国語科においては、「視野を広げて『魅力的な紙面を作ろう』（第 3 学年）および「新しい視点へ『好きなもの』を紹介しよう スピーチをする』（第 1 学年）とともに、「古典をもっと身近に『仁和寺にある法師—「徒然草」から』（第 2 学年）の授業実践を行った。本稿ではこの『徒然草』の実践について、研究授業前の実践内容とあわせて報告する。なお、豊田は授業者、小川は共同研究者として当該授業および授業後の研究会に関わった。研究授業は、全三次 5 時間のうちの三次 4 時間目である。

本校国語科が考える「自分の考えを表現する生徒」とは、伝えたい内容や自分の考えを具体例や根拠を用いて話したり書いたりする姿や、そこから新しい考えを生み出したりする姿である。既知の知識や経験と結び付けて考えることで、より具体的に自分の考えを表現することができるであろう。このため、様々な場面で主体的に活用していきけるような言語活動を設定した授業実践を行うこととした。

国語科学習指導要領では、「言葉による見方・考え方を働かせる」ことを「生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり、問い直したりして、言葉への自覚を高めること」としている。さらに、「言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている」という特性があり、言語能力を育成する中心的な役割を担っていると言える。そこで、『言葉』を軸にして理解したり、表現したりする授業実践を通して」という副題を設定し、研究主題に迫っていくこととした。

3. 古典と現代をつなぐ―「視点一覧表」の改訂と古典における活用―

はじめに述べたように、古典と現代を生きる自分とを結びつけていくという意識の育成を図ることが求められているわけであるが、国語の授業において古典と現代とのつながりは、①作品の内容、②学び方という大きく2つの方向から意識づけていくことが可能であろう。

まず①は、作品の内容を読み取り、現代を生きる自分たちと共通する部分を知ったり、これからに活かしていったりするという意識付けをはかるものである。

これに対し②は、現代文の授業と古典の授業とで学び方の一部を共通させることにより、これまでに習得した方法を援用することで古典も読み解くことができる、古典は遠いものではないという意識を持たせることをねらうものである。本校国語科研究主題と結びつけて述べれば、現代文における学び方という「既知の知識や経験」を、古典の学びに結び付け、考えを広げ深める生徒を育成したいと考えたわけである。この観点から、本校国語科で平成24年度から現代文の授業において活用してきた「視点一覧表」を、新たに古典の授業にも取り入れることとした。

3.1 「視点一覧表」の改訂

「視点一覧表」は、山田・野々村（2019）においてその活用の一端を提示したとおり、「ホリスティックな学びを生み出す教科指導」という副題が掲げられた平成24年度の具体的方策として作成し、以後、改訂を重ねながら活用してきたものである。「読むこと」領域において文章の中で重要になる工夫を見つけ出すことや、「書くこと」領域において自分の文章表現をより良くするための工夫として活用することを目指して、1年次から授業において使用している。

今年度は「言葉による見方・考え方を働かせる」と関連付けながら改善を行い、配布プリントだけでなく、各授業の際にも黒板に位置付けながら生徒と共有を図った。この「視点一覧表」には文章表現に含まれる「内容・構成・表現」の3要素とその具体的な例（助詞、文末表現など）を掲出している（2019年版「視点一覧表」は次頁に示す）。文章表現の3要素と「言葉による見方・考え方」を働かせることを促す視点との関係性は次のようにとらえることができる。

「内容」…伝えたい内容を正確に理解したり、適切に表現したりするために、どのような言葉を選んでいるかという点に着目する。

「構成」…言葉と言葉や段落と段落がどのように組み立てられているかという点に着目し、文章の構造や作品の展開を捉える。

「表現」…作品の中の叙述を特徴付けるための表現技法に着目し、その効果を考える。

これらを踏まえて、「言葉による見方・考え方」を働かせることを促すための視点として生徒によりわかりやすく提示するために、今年度は「内容」「構成」「表現」それぞれに対して「言葉の選び方」「言葉の組み立て方」「言葉の表し方」という文言を付加した。

授業では、生徒が言葉にどのように注目しているかを視点と結び付けて価値付けるなどして活用した。また、授業を通して新たに見つけた視点を「視点一覧表」に追加したり、複数の視点で内容を読み解いたりするなど、柔軟に活用していけるようにした。このような授業内における追加のひとつが、次項で触れるとおり、古典分野における「係り結び」である。

国語科 2019「視点一覧表」

() (年) (組) (番 名前)

<p>国語の学習は、「言葉」を通して、「相手」との関わりをより深くしなげていく。話すこと・聞くこと・書くこと・読むことを通して、教材や題材などの内容を理解することが出来る。また、自分のことを知ってもらったり、相手のことを理解したりすることが出来る。</p>	<p>内容の工夫・・・言葉の選び方はどうか？</p> <p>辞書 描写 修飾語 助詞 助動詞 具体例 文末表現 項目立て</p> <p>言葉の意味の違い（情熱と熱情など） 心情・行動・情景などの描写 詳しくする言葉の違い 助詞（こそ・さえ・も・には など）の違い 助動詞（れる・そうだ・ない など）の違い どんな具体例か。何を何で例にしているのか 「のだ」「だろう」など、印象付ける 簡条書きや項目を立てて、分かりやすくする</p>	<p>表現の工夫・・・言葉の表し方とどうか？</p> <p>比喩 倒置 対句 反復 省略 擬音語 擬態語 体言止め 色彩 五感 数値 図表</p> <p>直喩・隠喩・擬人法でイメージを広げる 文の順序を入れ替え、強調する 似たような表現を用いる 同じ言葉を繰り返して強める 途中で省略して、イメージを広げる 耳で感じることを表現する 状態の印象を表現する 体言で終わることによって、印象付ける 彩りを加えることによって、イメージを広げる 五感を使った表現で想像させる 数値によって、具体化する 図表によって分かりやすくする</p>
<p>★自分が「注目して」、つなぐことができれば聞くことと読むことが出来る。</p> <p>★相手の「注目をせよ」、つなぐことが出来る。</p>	<p>構成の工夫・・・言葉の組み立て方はどうか？</p> <p>順序 対比 文章構成 つながり</p> <p>文章の順序によって、印象を強める まとまりごとに意味を対比する 三部や四部など構成を工夫する 「事実と意見」「説明と具体例」「原因と結果」「問いと答え」「話題と考え」などを作る 接続語によって、構成を分かりやすくする 一単語・一文節レベル言い切り、印象付ける いつ・どこで・だれが・なにを・なぜ・どのようにしたのか整理する 作者がどんな人物なのか 作品の時代背景はどのようなものか</p>	<p>授業では、注目をせよ・注目をせよのための「視点」をみんなと共有し、活用してこられた。</p> <p>この「視点」を理解して、授業を超えて、自分で活用できることを目指してこい。</p>
<p>授業では、注目をせよ・注目をせよのための「視点」をみんなと共有し、活用してこられた。</p> <p>この「視点」を理解して、授業を超えて、自分で活用できることを目指してこい。</p>	<p>接続語 短文 5W1H 作者 時代背景</p>	

3.2 「視点一覧表」と『枕草子』『徒然草』

『枕草子』

「視点一覧表」を古典分野において活用するにあたり、まずは『枕草子』の授業に導入した（2019年5月）。「視点一覧表をもとに『枕草子』の工夫見つけをしよう」という学習課題を設定し、『枕草子』序段の読み取りを实践した。「視点一覧表」における「内容・選び方」「構成・組み立て方」「表現・表し方」のいずれもが『枕草子』に含まれていることを生徒たちが確認し、それを板書として位置付けることにより、現代文と古典とで言葉のあり方に共通性が認められること、さらに、これまで現代文で取り組んできた学習方法が古典の学びにおいても活用できることを共有した。



（『枕草子』板書）

『徒然草』序段

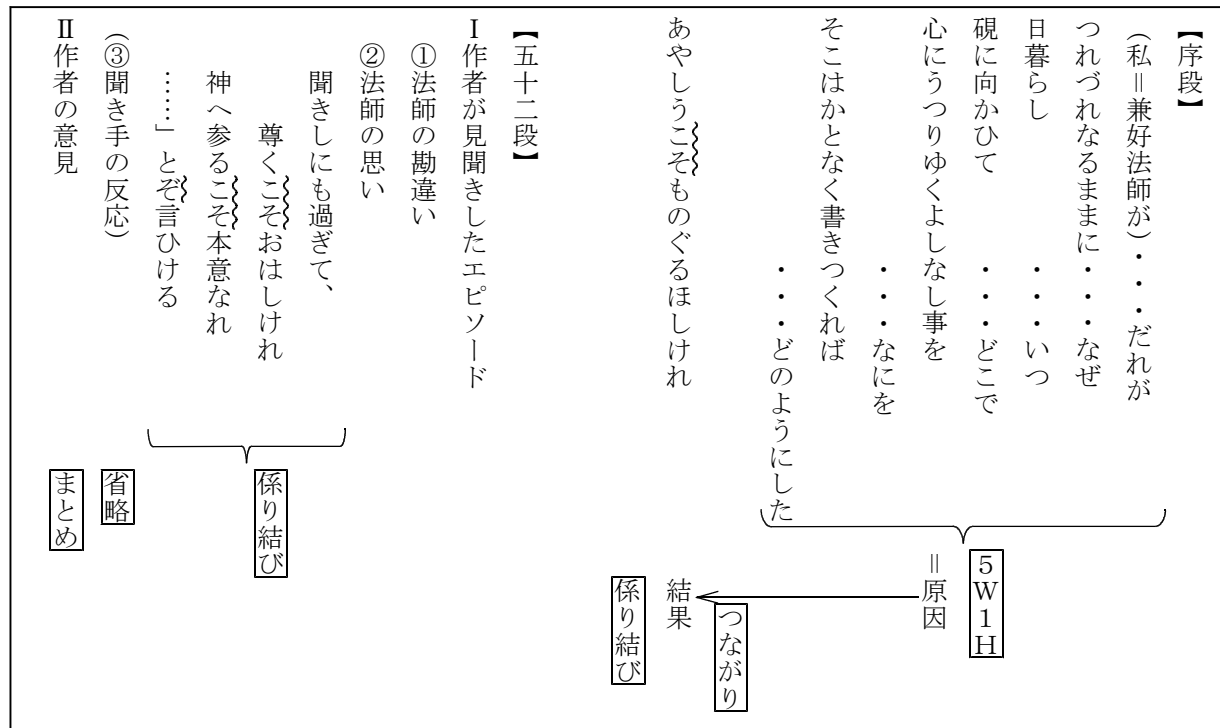
次に、『徒然草』序段の学習をするにあたり、「視点一覧表」に係り結び（以下、本稿では、「視点一覧表」掲出の項目に四角囲みを施す）という項目を付け加えさせた。これは、古典には現代文と異なる特有の表現があり、それが読み取りに際し有効な視点となることを学習するとともに、「視点一覧表」に掲載された視点がすべてではないこと、新たな作品・文章と向き合う中で読み取りの視点を増やしていくことが重要であると認識することを促したものである。なお、この学習に際し、既習教材である『竹取物語』冒頭部分を援用した。

加えて、「視点一覧表」の「構成・組み立て方」のうち、5W1Hおよびつながりがこの章段において用いられていることを確認した。序段では、5W1Hを用いて表現された作者の「書きつく」という行動が「あやしうこそものぐるほしけれ」という感情を引き起こした、という因果関係（=つながり）を読み取ることができる。さらに、そこで引き起こされた感情は係り結びによって強調されるという構図がある。この構図を「視点一覧表」と照らし合わせながら学習することにより、現代文と古典における言葉および学習方法のつながりについて、再確認と定着を図った。

『徒然草』第五十二段

続いて、『徒然草』第五十二段においても同様に「視点一覧表」を活用しながら読み取りを行った。教科書（光村図書中学2年国語）では三段落に分けられている当該章段であるが、第一段落（①法師の勘違い）と第二段落（②法師の思い）はI作者が見聞きしたエピソードとして括ることができ、続くII作者の意見（=まとめ）との二段構成と解することができる。②には係り結びが複数用いられ、念願叶って石清水を訪れた（と信じ込んだ）法師の思いが強調されている。この強調により、法師の思いと①で示された事実との落差がいつそう際立つこととなる。さらに、②は法師自身の発話という形で表現されており、発話を耳にした「かたへの人」なる聞き手の存在も明記されているにもかかわらず、この聞き手の反応が当該章段において記されることはない（=省略）。この省略により、まとめが強調されることとなる。授業では、このように「視点一覧表」に掲出された視点を活用した読み

取りを通して、兼好法師のものの見方や考え方を理解し、共感的に受け入れて読み深めることを目指した。なお、「視点一覧表」を用いた読み取りは4人ずつの学習グループで行ったが、**時代背景**という視点から、「仁和寺」の法師と明記されたことによる**まとめ**の強調まで読み取りえたグループもあった^[3]。グループ間における読み取りの差異は、当該授業後半の全体交流で共有を図った。



(「視点一覧表」を用いた『徒然草』の構図整理)

以上の実践は、『枕草子』『徒然草』のように時代および作者の異なる古典文学作品においても、「視点一覧表」を中心とした言葉に対する視点が、作者の工夫を見つけ出すことや、その工夫によってもたらされた効果の読み取りに有効であると生徒たちに実感させることを意図したものである。

授業後の生徒のふり返りは以下のようなものである。

a 「係り結び」の技は、少し難しいと思った。竹取物語の冒頭部分を改めて読んだ時、文末表現が所々違うなど思ったけど、なんとも思わなかった。でも、二つの文には「なむ」という語が文中にあるという共通点からそんな技になるなんて正直驚いた。「ぞ」とか「こそ」という言葉は、現代でも強調したい時に使うことはあるので、現代の言葉と比べながら古典を読んでもいいなと思った。

b 冒頭部分を5W1Hで読み取った時に、わかりやすい!と思った。古典でも現代文と同じような視点で読み取ることができるのは不思議な感じがしたけど、昔の言葉があって今の言葉があるのだから、それは当たり前のことなのかもしれない。古典は苦手意識があったけど、そうやって考えてこれから色々な作品を読みたいと思った。

aは、『徒然草』序段の学習で係り結びを理解し、既習教材である『竹取物語』についても新たな学びを得ている。aの「現代の言葉と比べながら古典を読んでもいいなと思った」、bの「古典でも現代文と同じような視点で読み取ることができるのは不思議な感じがしたけど、昔の言葉があって今の言葉があるのだから、それは当たり前のことなのかもしれない」というふり返りからは、「視点一覧表」の活用によって古典と現代を生きる自分とを結びつけた生徒の姿が確認される。

4. 授業の構想

前項で記した内容を踏まえて、『徒然草』からさらに4章段を取り上げて発展的な学習を行ったのが中間研究会における授業実践である。引き続き「視点一覧表」を活用して内容の理解に役立てることができるようにするとともに、兼好法師のものの見方や考え方について、さらに広く理解し、知識や体験と関連付けて自分の考えがもてるようにすることを目指した。すなわち、前述した古典と現代とをつなぐ2つの方向（①作品の内容、②学び方）をともに取り入れる形での授業実践を行ったものである。単元全体の指導計画は以下のとおりである。

言語活動とその特徴

本教材では、『徒然草』の『人生訓』を紹介する。」という言語活動を終末に位置付けた。兼好法師が見聞きし、感じたことを理解したうえで、自分の知識や体験と関連付けて自分の考えを形成する力を身に付けさせることを意図したものである。兼好法師のものの見方や考え方に触れ、現代や自分自身に共通する部分はないか自ら問い、人生のより良い生き方や考え方について感じたことをまとめ、紹介することで古典の世界をもっと身近に感じさせることをねらい、言語活動を設定した。

教材について

「徒然草」は、鎌倉時代の代表的な随筆文学である。兼好法師の豊かな感性と鋭い観察とによって、身の回りの出来事や自然について、簡潔な文章でまとめられている。それらは、現代の私たちの日常生活や社会生活にも通じる部分がある。そのため、生徒が自己の体験と重ね合わせたり、自分の考え方や生き方の参考にしたりできるものが多く、古典作品に親しみを感じ、自分の考えをもつことが期待できる。

本時では、「徒然草」の中でも、生徒の日常や経験を想起しやすい出来事や人物が描かれている章段を取り扱うようにした。兼好法師が見たり話を聞いたりしたことや、登場人物の行動などは、似たような体験をしている生徒も多くいるだろう。古典に描かれた世界を身近なものとしてとらえることができ、生徒が主体的に学習に取り組み、より自分の考えをもちやすくと考える。現代語訳や補助資料をもとに解釈をし、自分の経験に引き寄せて古典に親しむ態度を養いたい。

単元構成および指導について

第一次では、新元号「令和」の出典は「万葉集」であることを取り上げ、古典に興味をもって学習に取り組めるようにする。また、係り結びについて知り、視点一覧表に加え、今後の学習で係り結びに着目して内容を理解できるように見通しをもつ。

第二次では、「徒然草」の序段、第五十二段を読み、視点一覧表を活用して内容の理解に役立てることができるようにする。兼好法師のものの見方や考え方を理解し、共感的に受け入れて読み深めるようにする。

第三次では、「徒然草」にある複数の章段を取り上げ、兼好法師のものの見方や考え方について、さらに広く理解し、知識や体験と関連付けて自分の考えがもてるようにする。

単元の指導目標

- 「徒然草」の世界観や作者のものの見方や考え方に触れ、自分の知識や経験と重ねて読むことができる。【国語への関心・意欲・態度】
- ◎登場人物の行動や作者のものの見方や考え方について、自分の知識や経験と関連付けて考えをもつことができる。【読むこと エ】
- 「徒然草」の章段に登場する人物の行動に着目し、作者の思いや感じ方を想像しながら読むことが

できる。【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 イ】

単元指導計画（全5時間）

次	時	学習活動（◎学習課題）	評価規準	研究に関わって
1	1	古典からどんなことが学べるのだろう。 ・日常生活の中で古典に関係しているものを知る。 （百人一首，干支，新元号「令和」など） ・「係り結び」の表現について知る。	これまでに学習した古典作品を読み，自分の考えをもち，積極的に交流しようとしている。 【関心・意欲・態度】	【研究内容1—(1)】 「視点一覧表」に，古典の特有の表現である係り結びを加え，古典の学習の新たな視点にする。
2	2	「徒然草」の基礎知識を整理し，序段では何を述べているのだろう。 ・5W1Hの視点で序段を解釈する。 ・「係り結び」の工夫とその効果を理解する。 ・「いにしえ」と「今」の共通点と相違点を捉える。	「徒然草」の序段を読み，兼好法師のものの見方や考え方に興味をもっている。 【伝国 イ】	【研究内容1—(1)】 「視点一覧表」を活用して，序段や第五十二段の内容を読み取ろうとしている。
	3	仁和寺にある法師の「勘違い」の話をもとに，兼好法師はどのように考えているだろう。 ・第五十二段の概要を確認する。 ・「係り結び」に着目して，「法師の勘違い」と「法師の思い」を読み取る。	第五十二段の内容を捉え，登場人物や筆者の思いを想像しながら読んでいる。 【伝国 イ】	
3	4	「徒然草」の他の段を読み，自分の考えを書こう。 （本時） ・グループごとで選んだ話を解釈し，兼好法師の主張点をまとめる。 ・自分の意見の根拠となる「体験」や「理由」を書く。	「徒然草」の他の段を読み，現代語訳や表現の工夫をもとに，兼好法師が取り上げた話題と兼好法師の意見を理解し，自分の考えをもっている。 【読むこと エ】	【研究内容1—(1)】 取り上げた「徒然草」の段を読み取るために，エピソードと作者の意見の構成や表現の工夫に着目するようにする。
	5	仲間の考えを聞き，自分の考えを深めよう。 ・「人生訓」を作成する。 ・自分とは違う話を選んでいる仲間と交流する。 ・「いにしえ」と「今」の共通点と相違点を捉える。	登場人物の行動や作者のものの見方や考え方について，自分の知識や経験と関連付けて考えをもち，「人生訓」を作成している。 【読むこと エ】	【研究内容2】 兼好法師の着眼点や意見に対して共感できる部分を自分の知識や経験と照らして再構築し，端的にまとめる。

以上の指導計画に基づく学習のうち，本稿では4時間目の授業における学習の実際を取り上げる。この時間では，授業者が提示した『徒然草』4章段（①高名の木登り（第百九段） ②双六の上手（第百十段） ③友とするに（第百十七段） ④花はさかりに（第百三十七段））について，グループで交流し，兼好法師が取り上げた話題と兼好法師の意見を分析することを中心に進めた。この4章段はいずれも本校で使用している光村図書中学2年国語教科書あるいは国語便覧に本文が掲載されているものである。グループ交流では，「視点一覧表」を活用しながらエピソードと作者の意見の構成や表

現の工夫に着目させることを意図した。この4時間目の具体的な授業展開は以下のとおりである。

本時の目標（4時間目）

「徒然草」の他の段から、話題の中心となる人物やその出来事から兼好法師が考えたことを読み取る活動を通して、兼好法師のものの見方や考え方は、現代にも通じるものがあることに気づき、自分の生活と比較して考えを持つことができる。

本時の展開（4／5）

学 習 活 動	教師の指導・援助
<p>一、「徒然草」第五十二段の概要を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二段落目（最後の一文）に、兼好法師の意見が書かれている。 ・係り結びを用いて、仁和寺にある法師の勘違いの部分を強調している。 <p>二、本時の課題を確認する。（「見通し」を立てる時間） 「徒然草」の他の段を読み、自分の考えを書こう。</p>	<p>〈全体研究に関わって〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古典を日常に取り入れられないかを考え、「徒然草」の幾つかの話の中から、現代でも生かせるような内容をまとめられるよう見通しをもたせる。
<p>三、「徒然草」の他の段を読み、概要を理解する。</p> <p>四、グループで「徒然草」の他の段を選び、兼好法師が取り上げた話題と兼好法師の意見を分析する。</p> <p>【選んだ話の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第百九段は、兼好法師が木登りの名人から聞いた話が元になっている。 ・名人は、高い所で作業させている時には何も言わないが、もうすぐ着地できる所まで降りてきた時に注意する声をかけていた。兼好法師は、名人のこの姿に疑問をもった。 ・名人は、「危ないと思っているうちは自分で用心しているから大丈夫。でも、自分が大丈夫だと安心した時に失敗してしまうものだ。」と答えた。 <p>【兼好法師の意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名人が言っていることは徳の高い人の戒めと合致している。 ・兼好法師は、蹴鞠をやっている時の状況と照らし合わせて、名人の考え方に納得している。 <p>【表現の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・強意→「如何にかく言う㊦」 <p>名人の行動に対して疑問をもち、名人の言葉の真意を聞きたいという兼好法師の気持ちが強く表現されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対比表現→「あやしき下臈」と「聖人」 <p>どちらも名人のことを示している。身分は低いが、聖人が考えたことと同じくらいの考え方だと認めている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的仮名遣いや係り結びに注意して読むように伝える。 ・第五十二段のように、二段落目に兼好法師の意見が書かれていることを確認する。 ・取り上げる「徒然草」の段は、第五十二段のような二段落構成であるもの、表現技法や古語の意味から内容が理解しやすいもの、兼好法師が捉えたことが、現代でも共感しやすいものを選ぶようにする。 ・四人で学習グループを編成し、対話を通して四つの話の中から一つを選ぶようにする。また、選んだ話について、三つの視点で内容を理解できるようにする。 ・現代語訳や、補助資料を参考にしながら、正しく解釈ができるようにする。 <p>〈教科の研究に関わって〉</p> <p>研究内容1—(1)「視点一覧表」の活用と改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取り上げた「徒然草」の段を読み取るために、エピソード

	ドと作者の意見の構成や表現の工夫に着目するようにする。
<p>五、グループで分析したことをもとに、自分の考えをまとめる。</p> <p>(1)兼好法師は、木登りの名人の「高いところにいる時よりも、もう少しで地面だという時の方が用心すべきだ。」という意見に共感を持ち、その考え方を褒めている。</p> <p>(2)二段落目に、名人のことを「あやしき下臈なれども」と表現しているの、見下した言い方をしているのかと思ったが、その後の「聖人の戒め」を引き立てるために表現したのだと考えた。名人は、身分は低いけど、その考え方は聖人の考え方と合致するものだと兼好法師は捉えている。</p> <p>(3)この話から、「油断大敵」という言葉とその意味が似ていると思った。私も部活でシュートを打つ時に、ディフェンスがたくさんいる時は、ゴールに集中してねらって打つけど、敵がいなくてノーマークでシュートを打つ時は、大丈夫だろうと思って気を抜いてしまい、シュートを外してしまうことがあった。だから、もう大丈夫だと思った時こそ、気持ちを引き締めなければいけないと思った。名人の考え方や、その考え方に納得している兼好法師の気持ちは、現代の私たちに通じるものがあると考えた。</p>	<p>・自分の考えを書く際の構成を提示する。</p> <p>(1)兼好法師の着眼点や意見を端的にまとめる。</p> <p>(2)表現の工夫や特徴を、古文の表現を取り上げて説明する。</p> <p>(3)自分の意見の根拠となる「体験」や「理由」を書く。</p> <p>・意見が持てない生徒に対して、同じグループの仲間に意見を聞いたり、自分の実体験と結びつけたりするように助言する。</p>

5. おわりに

生徒は、現代語訳や国語便覧などの資料を参考にしながら、兼好法師が伝えている内容を捉えようとしていた。また、言葉に関しては、『枕草子』および『徒然草』序段、第五十二段とは異なる工夫を「視点一覧表」から見出す様子が認められた。第百十七段を例にとると、「構成の工夫」（言葉の組み立て方）から「順序」、「対比」、「表現の工夫」（言葉の表し方）から「数値」、「体言止め」を読み取りの中で見つけた。4つの章段それぞれに、状況や考え方の対比、具体例を挙げる順序、係り結びの効果などを見つけ、その後、自分の実体験と結び付けて考えることができた。

本時（4時間目）は1つの章段に対する自分の考えを書く活動であったため、他のグループが取り上げた章段についても交流する時間を次時（5時間目）に設け、板書による共有を図った。



（5時間目の板書）

以上の実践から、古典の学習でも「視点一覧表」を用いて読み取りを進めることで、筆者が伝えている内容や伝え方の工夫に気付き、より深く理解することができたと考えられる。古典と現代を生きる自分とを、感じ方や考え方など内容的に結び付けていくだけでなく、どのような視点で読み取るか、その読み取りからどのような効果を見出すかといった学び方をも結び付けることで、生徒の抵抗感

が軽減されることが明らかとなった。

本校は令和2年度より義務教育学校となる。9年間教育へ移行することにより、弾力的なカリキュラムの構成が可能となる。9年間の国語科教育の中で古典の学習をどのように位置付けていくか、内容だけでなく学び方という点でも現代へと結びつけていく方策について、今回の実践を踏まえ、検討を重ねることとしたい。

参考文献

山田敏弘・野々村琢磨 2019「語彙的文章分析を用いた中学国語 「握手」 の授業実践」『岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）』第21巻

[1]小川陽子（おがわ・ようこ）岐阜大学教育学部准教授

[2]豊田有美（とよだ・ゆみ）岐阜大学教育学部附属中学校教諭

[3]本校で使用している国語便覧（岐阜県中学校国語資料研究会編 2015年・浜島書店）では、仁和寺について「格調高い寺」「文学と関わりが深い僧も多く」という解説がなされており、「そんなエリート法師の失敗だから、おもしろく語られたんだね」との吹き出しも付されている。生徒たちはこれを参照することで、当該章段ではあえて「仁和寺」という名を明記したのだろう、それほどの寺における年配の法師でさえも誤ることはあると記すことによって「先達」の重要性が強調されている、という読み取りに至った。